

# 書評

B O O K

## 戦争と医学

西山勝夫 編著



発行 文理閣  
電話 075 (351) 7553  
A5判 / 406 ページ  
2014年7月25日第1刷発行  
定価 2,800円+税

戦時下の中国で、日本の医学者・医師たちが生体解剖や人体実験を行った。それが満州（中国東北部）に駐留した日本陸軍部隊（関東軍）がハルビン市近郊に組織した731部隊であった。

第2次大戦中に、中国で石井四郎部隊長が率いる731部隊が中国人約3000人に数々の生体実験を行った。生きた人間に散弾銃を撃ってその結果はどうであったか、冷たい満州の冬空に外で凍傷実験、ペスト菌を注射してどのような経過をたどって死にいたるか、毒ガスではどんな反応があるか——などの生体実験を繰り返し、最後には証拠隠滅のため、全員射殺した。また、各地でペスト菌に感染したねずみを放って、中国の住民に感染させたなどの事実が聞き取り調査で報告されている。

これらの膨大な実験資料を戦後処理の裁判で、当時ソ連と冷戦状態にあった米国に渡すことによって、731部隊の責任は不問にされた。一方、ドイツでは医学者・医師で戦争協力者は処刑されている。

西山勝夫滋賀医科大学名誉教授は15年戦争と位置づけて、豊富な文献や資料および現地での聞き取り調査によってこのような内容を実証している。なお、

最近中国では、日本が埋めた毒ガスによる被害が死亡も含め多発し、日本ではあまり報道されないが大きな問題であると調査報告書に記載されている。

本書は4部構成からなり、第1部は著者の「戦争と医学」のテーマに関する学術研究の端緒から今日に至る論考。第2部は731部隊に加担あるいは加担したとされる医学者・医師たちの出自解明のために取り組んだ彼らの学位授与過程の調査研究。第3部はかつての侵略先における日本の医学者・医師たちの加担の実態を解明するために訪中した際の調査記録の中から、被害者側の証言や告発、関係研究者の調査研究・発掘報告の講話などを収録している。第4部は「戦争と医学」とりわけ「医の倫理」問題を究明し、現在・未来に生かすためとしている。

この中で、筆者が特に強い印象を受けたのは、中国での日本軍、特に731部隊が行った残酷で卑劣な、生きた人間を「もの」として扱ったことを証言した記録である。

ひとりの医療従事者としてぜひ、一度、手に取っていただきたい1冊である。（「戦争と医の論理」の検証を進める会代表世話人・赤羽根 巖）